

## 技術論文誌の歩み

当社の技術論文誌は1974年に創刊された研究紀要が始まりである。その後、1991年にINTEC Technical Report (略称:ITR)と名称、体裁を改め、2003年に再度、今のINTEC Technical Journal (略称:ITJ)に衣替えをして現在まで続いている。研究紀要創刊号から数えると前号のITJ第16号は通算で74号となり、論文数総計は680編となった。平均すると1年あたり1.8回の発行、1号あたり9.2編の論文数である。680編中、666編が情報通信技術に関する論文、あとの14編は事務、経理、営業、産業分析に関するものとなっている。論文は個人ないしチームによる開発報告・研究報告となっており、時々の技術動向を反映している。

以下に、これまでの歩みを研究紀要、ITR、ITJの3段階に分けて振り返る。

### 1. 研究紀要 (1974年～1991年、31回の発行)

研究紀要は学術・技術的に高度な技術情報を社内外に公表する場として、1974年12月に第1号が発刊された。1974年は創立11年目にあたり、10年余りを経て、当社も対外的に技術発表ができるまでに成長を遂げたと言える。この時期、当社は自社の専用回線網「TecAceNet」を利用したオンラインTSSサービスを行うとともに、バンキングシステムを始めとする大型ソフトウェア開発を続々と行う時代に入っていた。

第1号の発刊に際して当時の金岡幸二社長は、巻頭言で次のように述べている。

「私は日頃、当社の集団的研究体質の強化を強調している。これは、きびしい経済環境を克服し、競争に打ちかっていくために、きわめて重要なことであるからである。研究意欲の高揚をめざして特別研究室を新設し、また、ソフトウェアモジュール研究組合に参加し、その成果も徐々に上がっている。このようななかで、ここに研究紀要第1号を発刊することは、まことに意義深いものがあり、当社の研究体質が次第に定着しつつあることを示すものである。…(中略)…願わくば、日常の地道な業務の中より、自由な創造的発想が生まれてくる動機に、この研究紀要がなれば、まことに幸である。」

記念すべき第1号は以下の6編、71ページで構成されている。

- ① コンピュータ室の管理・運営の機械化について
- ② リアルタイム・プログラムテスト方法
- ③ ベーシック・ソフトウェア・ドキュメンテーション
- ④ 数量化理論第Ⅲ類による富山市商業の分析
- ⑤ 財務管理のための諸表
- ⑥ 事務と事務の考え方の変遷に関する小論

研究紀要の創刊は1974年であるが、その後、若干のブランクがあり、第2号がでたのは1978年であった。第2号以降は毎年2、3回の発行があり、1991年の第31号まで続いた。研究紀要の特徴として総説的な論文が多かったことがあげられる。例を挙げると次のとおりである。

- 2号(1978年)「マイクロコンピュータの動向と当社に与える影響について」
- 2号(1978年)「コンピュータ技術における安全施策」
- 5号(1979年)「手書き漢字の認識」
- 7号(1980年)「地方自治体の情報化とその対応」
- 8号(1980年)「オフィス・コンピュータの利用とその動向」
- 8号(1980年)「サービス経済化と就業構造の変化」
- 9号(1981年)「電政懇答申と新しい通信政策のあり方について」
- 11号(1983年)「オフィス・オートメーションの実態と将来」

総説的な論文が多いのは、まだ情報サービス産業としても、これから伸びようとする時期であり大所高所の議論がとびかっていたこと、専門誌も少なく動向解説が望まれたことなどによるものであろう。

研究紀要は31回発行しているが特集を組んだ号が1度だけあった。それは1985年4月の発行の第15号で、特集タイトルは「特集 Ace Telenetと高度情報通信」。同月、当社は当時の郵政省に対して、不特定多数向け大規模通信事業者「特別第二種電気通信事業者」の申請を行い、第1号として登録されている。最初のサービスメニューは、パケット交換サービス「AceTelenet」であった。第15号ではこの「AceTelenet」に関する多くの論文を載せるとともに、その後の通信ネットワークの展望についても論じている。

図1に研究紀要の創刊号と第16号の表紙を載せた。創刊号から第15号まではB5版の無地の表紙であったが、第16号より図案入りとなった。



図1 研究紀要第1号と第16号の表紙

### 2. INTEC Technical Report (ITR) (1991年～2002年、27回の発行)

1991年、通算32号で研究紀要はINTEC Technical Report (ITR)と名称変更し、大きさもB5サイズからA4サイズに変更した。表紙もカラーの多色刷りを使って一新した。内容構成面では研究紀要を引き継いでおり、号数も連続している。

総論的な論文は減り、代わってフォーカスを絞った論文が多数を占めるようになった。技術的に、ある程度の成熟期にはいったと見るべきなのかもしれない。特徴としては1989年に研究開発部門として独立したインテック・システム研究所からの投稿が増えたことがあげられる。ITR全体としては研究所からの投稿は42%に達している。

1994年、業界全体がマイナス成長を経験するという厳しい状況の中において当社は第二創業として新たなスタートを切った。このあと、しばらくはオープンシステム、インターネットの時代を反映した論文が多くなっている。第55号(2000年)では特集「インテックのインターネットサービス」が編集された。これは、ITRの27回の発行の中で唯一の特集号であった。15編の論文が収録されているが、当時のインターネット技術がビジネスにもたらした様々な影響を表している興味深い。

図2にITR第33号と第55号の表紙を載せた。第32号から第54号までは同じデザインを用いている。第55号では特集インターネットの影響か、開放感あるデザインに変更され、そのパターンで第58号まで続いた。



図2 ITR 第33号と第55号の表紙

### 3. INTEC Technical Journal (ITJ) (2003年～現在、16回の発行)

2003年、当社は40周年を迎えた。これを契機にITRは名称を「INTEC Technical Journal」(ITJ)と改め、装いも新たにした。お客さま、ならびに世の中へ当社事業戦略に関する技術を発信することに重きをおき、毎回、特集を組むことにした。特集論文以外に個別論文も収録しているが、研究紀要やITRの時にはそれぞれ1度しか、特集を組んでいないことと比較すると大きな違いである。これまでに行った特集テーマは以下のとおりである。

- 1号(2003年)「レガシー・マイグレーション」、  
「CRMソリューション」、  
「XML技術のEDI/Webサービスへの応用」
- 2号(2003年)「コンピュータ・ユーティリティ」、  
「セキュリティ・ソリューション」
- 3号(2004年)「BIソリューション」
- 4号(2005年)「アウトソーシング・サービス」、  
「LINUXを採用したシステム構築」

- 5号(2005年)「B2Bインテグレーションサービス」、  
「プロセス改善」
- 6号(2006年)「IPv6ソリューション」
- 7号(2007年)「MCFrameビジネス」、  
「プロジェクトマネジメント」
- 8号(2008年)「IT基盤の最適化」
- 9号(2009年)「情報セキュリティ・ソリューション」、  
「研究開発」
- 10号(2010年)「ビジネスプラットフォームサービス」
- 11号(2011年)「クラウド・コンピューティング」、  
「スマーター・ソーシャル・ストラクチャー」
- 12号(2012年)「スマート端末によるモバイルクラウド」
- 13号(2013年)「ソフトウェア生産環境の革新」
- 14号(2014年)「50年の研究開発の歩み」
- 15号(2015年)「ユビキタスプラットフォーム」
- 16号(2015年)「社会システム」

特集テーマは大別すると研究開発、商品開発、生産技術に分かれる。いずれも、お客さまへの訴求を重視した構成と書き方に変ってきた。ITJになってからは冊子としての配布に加えてホームページ上での論文公開も行っている。これにより、ITRまでに比べて多くの読者を得ることになったと思われる。

図3にITJ創刊号と第9号の表紙を載せた。



図3 ITJ 創刊号と第9号の表紙

ITJ創刊号の巻頭言において当時の中尾哲雄社長は次のように述べている。

「IT革命進展の中で、激しく変化する社会の中で、われわれはお客さまへの変わらぬ誠意をもって、変りつづけていきたいと思っております。

INTEC TECHNICAL JOURNALは、そのようなインテックの道しるべとなっていくものと確信しております。新たな創刊にあたり、わが社がお客さまの多様なニーズにお応えし、日本経済再生に微力ながら貢献できることを、そして若い社員の方々の「技術」への限りない挑戦を心から期待するものであります。」

この思いは今も変わらない。今後ともITJは、読者のお役に立つ誌面づくりの努力を重ねていく所存である。読者の方々には気付かれたことや感想などをお寄せいただくとありがたい。